



写真等無断転載禁止

オーストラリア 食と自然の探訪記 ~地球の裏側の食卓~

第1話「サラダボウル」とお米の話

昨年末に、家族でオーストラリアのパースに引越してきて、あっという間に半年が経ちました。パースはあまり聞きなれない土地だと思えますが、オーストラリアの西海岸に位置する西オーストラリア州の州都です。人口200万人ほどのオーストラリアでは4番目に大きな都市ですが、スワン・リバー沿いの少し内陸に位置する中心部はコンパクトにまとまっており、大半の人々は海沿いに広がって居住しているので、都会の喧騒とはかけ離れたのんびりした所です。



パースのビーチ。今の季節は真冬ですが、海ではサーフィンをする人をよく見ます。

その広大な土地を利用した小麦などの穀物、肉類、近海で採れるシーフードなどにより、西オーストラリア州の食料自給率は200%を超えられています。また、オーストラリアはイギリスを始めとする欧米系の国民の他、原住民であるアボリジニーに加え、世界中からの移民からなる多民族国家です。

ここでは、多様な背景を持つ人々がそれぞれの文化や個性を保ちながら共存しており、その様は「民族のサラダボウル」と表現されることがあります。スーパーに行くと様々な国や文化の食材が並んでおり、買い物をしながらちょっとした世界旅行の気分が味わえます。アジア系人口も多く、日本食材を始め、アジア系の食材も大体のものは手に入ります。

例えばお米。オーストラリアでは様々な種類のお米がスーパーに並んでいます。お米は米粒の形状に

オーストラリア 西オーストラリア州 岩沢 久美子
より分かれて、更にもっと種類によって分類されます。例えば、米粒が長い形の長粒米 (long grain rice) には、インド料理に使われるバスマティ・ライス、タイ料理に使われるジャスミン・ライスやインディカ米などがあります。

逆に粒が短いお米は短粒米 (short grain rice) と呼ばれ、日本米はこの短粒米に分類されます。短粒米は粘り気が強く、寿司に使われることが多いため、「スシ・ライス (sushi rice)」として売られていることが多いです。短粒米の中にはこの他、少し大粒でイタリア料理のリゾットなどに使われるアルボリオ米などもよく見かけます。

また、長粒米と短粒米の間くらいの中粒米 (medium grain rice) があります。日本ではカルフォルニア米として知られているカルロース米などがこれに当たります。長粒米よりしっとりして甘味があり、短粒米よりはパラパラしているので、ピラフやチャーハンなどに丁度よく、私が長く住んだ中東地域ではこちらの中粒米がよく使われていました。さらに変わったところでは、黒米もワイルド・ライスとかブラック・ライス、玄米はブラウン・ライスという名で売られています。



いつも行くスーパー。こんな風に色々な国の食材が売られています。日本食コーナーでは醤油や料理酒などが売られています。

これらの色々な種類のお米を見ながら、ここオーストラリアでは様々な民族や文化的背景を持つ

人々が、各家庭それぞれの食文化に合ったお米を使って様々な料理を作っていることを想像するだけで、なんだか楽しくなります。ちなみに我が家でも、インドカレーにはバスマティ・ライス、タイ料理にはジャスミン・ライスを使い、サラダの具として黒米を入れるなどして、様々なお米を使い分けています。

そして和食の時はというと、現地の「スシ・ライ

ス」も試してみたのですが、どうしても日本米独特の粘りや甘味が感じられず、日本食スーパーで新潟産コシヒカリを買っています。ちなみに、値段は50豪ドル(5,000円)程度。現地のスシ・ライはその半額の25豪ドル(2,500円)程度なので、割高ではありますが、やはり和食には日本の土と水で作られたお米が一番合うと思います。

アオダイショウのある日の出来事

僕はアオダイショウの幸太郎です。友人のアオダイショウの健太郎はかつてYPP 田んぼと呼んでいた田んぼの土水路から鳥のにおいがしたので、6月8日の早朝、水路を泳いでそのにおいがするところに着いたら人間がウシガエルを捕獲するために水中に設置している罠の中にまだ生きているヒクイナのヒナが二匹入って出ようとしていた。



幸太郎君です(撮影:平沼勝男)

この周りの田んぼは昨年から「開発問題」でちば環境情報センターの方々が耕さなくなったので、雑草が高く生い茂り、いつもの年のようなネズミやニホンアカガエルなどえさがいなくなった。健太郎はお腹がペコペコだったので本能的に罠の入り口の網からするっと中に入って、ヒクイナを生きたまま飲み込んだのを見た。まだ体は1/3くらいしか罠の中に入っていなかったが、一旦体全体を罠の中に入れてから反転してこの入り口から出ようと思った。網目を広げてぐいぐい外に体を出して行ったら飲み込んだヒナで膨らんだお腹でつかえた。健太郎の体の表面のうるこがじゃまして後退できず、水中なので次第に息が続かなくなった。

ふつうは入る前に警戒して入ったらどう出るか考えるのだが、これができなかった。人間用の大きな罠だったら人間だったら考えて入口の網を広げて出ることができるが、僕ら爬虫類はこの罠からでれな

聞き手：市原市 南川 忠男

い。僕は助けようとして健太郎が苦しんでいる時に罠の中にはいった。人間のように言葉が話せないの、健太郎も僕幸太郎に「入るな、出れないぞ」と言ってくれればよかった。健太郎は次第に息ができなくなり罠の中で命を終えました。頭を外にだした状態でした。こんなことで死ぬとは思わなかった。罠の中で僕らの重みで罠が沈みもう一匹の生きていたヒナも死んだ。この暑い日の10時ごろ(健太郎死亡3時間後)に平沼さんがいつもの作業として罠の点検にやってきた。

最後に入ったアオダイショウの僕は平沼さんを見て捕獲されるのではないかとこわがり、平沼さんが引き出して助けようとしているのにしっぽを絡ませて抵抗してしまった。平沼さんは助けようと罠から引っ張ってくれたのに感謝しないといけなかった。すいません。助けてくれてありがとう。こんな罠いらないよと僕は思った。



可哀そうな健太郎君です(撮影:平沼勝男)

平沼さんは死んだ健太郎の胴体にポッコリ膨らんでいる箇所を発見した。何を食べてこうなったのか知りたくなり、手にしていたナイフでおなかを割いてみたら出てきたのはヒクイナのヒナでした。せっかくこの地で繁殖しようとしていたのに涙がでそうでした。罠の中で僕たちが入って狭くなりもがいて食べられる前に死んだもう一羽のヒナもいた。二羽

はヒクイナの兄弟でしょう。ヒナは二羽いて一羽は食べられ健太郎の中で発見され、もう一羽は溺死しました。

この惨事を考え、ウシガエルの捕獲はゼロだったので YPP 田んぼの罟は二つあったが、平沼さんは二つとも撤去しました。

開発問題も解決し、YPP 田んぼで米作りが続けば、僕たちのえさは多いが今はえさが少なくなり今回のように水路の罟の中の幼鳥を飲み込むことはなかったかもと幸太郎は思った。健太郎の冥福を祈りつつ、雑草が生い茂っている田んぼの空を見上げるとトンボも少なくなった。



ヒクイナのヒナ(撮影:田中正彦 2022年5月11日)

九十九里海岸のスナメリ情報

久々に九十九里海岸のスナメリ情報をお届けします。



スナメリの親子

2025年7月27日(日)の出来事です。スナメリの群れが来ていました。濁った水のせいで、スナメリが呼吸のために水面に現れるときにしか見えません。見えた瞬間の色や大きさの違いから、複数のスナメリであることがわかりました。全部で5・6頭はいるようです。その中に常に並走して泳ぐ親子がいました。最近親子は目にしていたのですが、なかなか写真に収めることができませんでした。しかしこの日ようやく1枚撮影できました。

大網白里市 平沼 勝男

そのうちに若いウミネコが来てくれました。ウミネコはスナメリのおこぼれに預かろうと、常にスナメリの上にあります。私からは水中のスナメリは全く見る事が出来ないので大変助かります。時よりウミネコが凄いスピードで飛びます。そのおかげでスナメリの泳ぐスピードの凄さがわかりました。

スナメリは集団でボラの狩りをしている様でした。スナメリに追われたボラが跳ねる様子が写真に納まりました。ウミネコは果たしておこぼれを頂戴できたかどうか、不明です。



ボラを追うスナメリとウミネコ

新浜の話 90 ~ 妙典の土 ~

1997年、妙典土地区画整理組合とコアジサシのコロニー保護に努力していた時、かつて妙典にひろがっていた蓮田の土をいただけないだろうか、とお願いしたことがあります。ご快諾いただき、造成地に下水管などの管渠を設置する際に掘り上げられた蓮田の土を、たしかダンプに2台分ほど搬入していた

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子
だきました。たぶん造成された浄化池全体に水が入る前、1997年秋か冬のことだったと思います。場所は浄化池三系列の12枚目。搬入された土は灰色でこれといった特徴もありませんでしたが、区画整理組合の方が蓮田を作っておられた方に確かめて、間違いのないことでした。

スロマン 作: 7月 おきに



この雑草刈り、炎天下の中、ほんと大変なんです。実感します。

延々と続いたポンプのトラブルがようやく落ちついて、造成された浄化池全体に水が回ってしばらくしてから、1998年4月か5月のこと。浄化池三系列の12枚目で小さな蓮の葉を見つけました。妙典の蓮田が埋め立てられてから10年近く経っていましたが、土中でちゃんと生き延びて、池に水が張られると発芽してくれたのです。蓮だけではなく、キシウスズメノヒエやコナギ、アギナシといった懐かしい妙典の植物も育っていました。

蓮は元気よく育ち、夏には白い花をつけました。翌年も発芽してくれたのですが、残念ながら育つ範囲は広がらず、年々勢いが弱くなって、数年で消えてしまいました。ザリガニ等の食害のせいだったかもしれません。その後も何度かレンコンを植えて蓮を育てました。数年は続いて蓮が出ましたが、放っておいて定着するには至っていません。

妙典の土をいただく何年か前には、1993年度に造成されたみなと池に大町自然公園の池を浚渫した泥をいただいて入れたこともありました。もともと海底の土砂で造成された保護区の本土部には植物も淡水湿地の生きものも当初はいませんでしたが、干陸になると同時に風で運ばれた種子が芽生え、塩分に強いシロザほかがまず育ち、ほんの2、3年でほぼ全体が草原になりました。同じく風で運ばれた松や柳、そして鳥たちが落とした糞に含まれた桜、シロダモ、タブノキなどの樹木も次々に芽生えて、10年を過ぎるころには草丈をこえて伸びるようになりまし。1974年の造成から50年を過ぎた今では、保護区の全域が樹林帯と湿地になっています。妙典の土や大町の泥から定着したものも、静岡県浮島沼から鈴木晃夫理事長が導入したものも。達夫さんや清水大悟さんと一緒に館山から運んだヒシは今でも生きているはずです。

1998年から20年近くにわたって、町田安男・岡田節子のご夫妻が、おもに埼玉県吉川の水田から精力的にカエルやタニシ類を運んでくださいました。吉川のあたりはここらに宅地造成等の開発が盛んになり、緊急避難の意味も大きかったのです。この時初めて、ホウネンエビやカイエビなど、水田特有の不思議な生きものたちを見せていただきました。残念ながら、わずかに塩分の残る保護区の淡水域では、大半の生物は代を重ねるどころか、生き延びることすら難しかったようです。町田ご夫妻は浄化池の土手への斜路を作る時にできた小さい3つの池(町田池)に手を入れて、水生植物を世話され、増えすぎて開けた水面がなくならないよう、毎年5月5日前に刈り取った菖蒲を配っておられました。週末ごとに来られ、管理作業やお祭りなどを含めたあらゆる活動になくはならない存在でした。安男さんが90歳をこえた今は年に1、2度しかお目にかかれませんが。

自力で保護区に来たものたちと、導入されたものたち。この先どのように育って行くのでしょうか。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2025年 9月号(第337号)の発送を 9月 8日(月)10時から千葉市民活動支援センター(千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階)にておこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

..... あなたも入会しませんか

住所〒 _____
ふりがな _____
氏名 _____ Tel _____

E-mail _____

会費の郵便振替口座は 00130-3-369499 です。

NPO法人ちば環境情報センターのニュースレターとイベント情報は、リサイクルペーパーを使用しています。

編集後記：7月30日14時39分、兵庫県柏原町で41.2の国内歴代最高気温を記録しました。7月の平均気温が平年比+2.89と観測史上最高という発表もありました。さらに水不足も追い打ちをかけ、特に出穂期の稲への影響は深刻です。確実に地球温暖化が進行する中、経済優先の社会システムは、真剣に対応しているとは思えません。私たちの今の行動が、未来を作っていくことは明白なのです。諦めたくはありません。 mud-skipper

【活動報告】

<下大和田での活動> 写真：田中正彦

第306回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い 2025年 7月 6(日)はれ 報告：田中正彦

暑さで参加者が少ないかともいしましたが、13名の生きもの好きが集まりました。昨年からの開発問題で米づくりができなかった田んぼや畦は、すっかり草に覆われていました。緑米田んぼはヒシとガマが茂り、トチカガミはわずかに残る程度でした。そんな中でも、ミナミメダカは元気に泳ぎ回り、オオシオカラトンボ、ショウジョウトンボ、ニホンカワトンボ、クロスジギンヤンマなどたくさんのトンボが舞っていました。森に入ると2~3 くらい涼しいと感じられました。シャチホコガの幼虫の「のけぞりポーズ」やトリノフダマシの不思議な形に、みな興味津々で観察していました。



参加者 13名(大人9名、大学生2名、中学生1名、小学生1名)

畑の草取りと復田田んぼの整備 2025年 7月13日(日) くもり後はれ

下大和田の休耕田で、初めてハスの花が咲きました。この日は3つ咲いていただけですが、つぼみがまだたくさんついています。一方、ヒシに全面覆われた場所があり、酸素が不足して嫌な臭いを発していました。おそらく水質が悪くなり、水生生物にも悪影響がでてしまうでしょう。



連日暑い日が続いたので、7時から10時の時間帯で作業を行うことにしました。この日は、2~3日前から雨が降ったりしてやや涼しくはなりました。畑では、ラベンダーやイチゴ、ワタ、大豆、エンドウなどの間に生えた雑草を取りました。作業を始めると、汗が吹き出します。ミニトマトが収穫の時期を迎え、宝探しをするように摘み取りました。その後、参加者のお土産になりました。(報告:高橋久美子)

復田田んぼの草取りをしました。先週7月6日に川の堰が壊れていた為、急遽、土のうを6個入れて堰の機能を復活させました。もし今回その堰がまた壊れていたら、この田んぼのお米づくりは断念しようと思っていました。しかし堰は機能していました。田に水はありました。小さな田んぼなので、簡単に草取りはできると思いましたが実施にやってみると、アメリカセンダングサ、ヘラオモダカ他皆すべて大きく育てており、一つ一つ抜くのは結構力のいる作業でした。普段より早い時間帯のスタートでしたが(開始時間8時頃)、蒸し暑くかなりの重労働でした。それでも1時間30分ほどで除草できました。(報告:平沼勝男)

参加者 9名(大人8名、大学生1名)

水路の草刈り 2025年 7月20日(日) はれ 報告：平沼勝男

この日の作業は、7月26日に行われる夏休み特別企画『川遊びの会』の会場づくりです。梅雨明け宣言が出てかなり暑くなるとの予想のため、作業時間を朝7時~9時としました。これは大正解でした。

開発が絡み、ほとんどの行事ができなくなった下大和田 YPP 田んぼ。その裏を流れる水路が会場なのですが、手つかずの川の周辺や川の中は、アシヤマコモ、ショウブなどが入りこみ、威勢よく伸び放題になっていました。このままでは川遊びなどできません。まずは刈り払い機3台で川の周辺の草を刈り取りました。



刈り払い機の威力は凄まじく、30分しないうちに予定地の刈り取り終了。10分ほど休憩&水分補給をして、次の作業は川中に入ってアシヤマコモの刈り取りです。これは鎌を使った手作業でした。刈りとった草を除去するのは3人の女性たちです。川の中に入ることもなく、大変暑かったと思います。9時までには予定地すべて終了しました。こんな暑い中の作業でしたが、これほどピフォアアフターがはっきりする作業は珍しく、気分は爽快でした。

参加者 7名(大人7名)

お楽しみ会「川遊び」 2025年 7月26日(土) 10:00~12:30 はれ 報告：平沼勝男

参加者は普段から谷津田に来ていただいている人たちでした。そしてこの日はボランティアが6名来ていただきました。中学生、高校生、大学院生、そして社会人。皆さん下大和田は初めてでしたが、皆自然好きの

人たちでした。スタッフもフレッシュな人たちの参加で楽しむことができました。魚の取り方の説明がスタッフからあり、ここからスタートです。参加者とボランティアの皆さんがたも網を手に川に入りました。あいにく川の方は流れが悪く泥が堆積し、水位も低いためか捕れる生き物が少なかったです。しかし川の水は冷たくて気持ちがよく、みな夢中で魚やエビを捕っていました。



前後合わせて一時間の魚捕りが終わるとスタッフからこの日捕えられた生き物の説明がありました。そして最後は恒例のザリガニの塩ゆです。初めてザリガニを食べる人が多く、最初は慎重に口に入れていましたが、おいしさがわかると笑顔がこぼれました。

参加者20名(大人13名、大学生1名、高校生2名、中学生2名、小学生2名)

< 小山町での活動 >

猛暑のため、7月の学校田んぼおよびYPPの活動は中止となりました。

【谷津田・季節のたより】 2025年 7月

< 下大和田町 > 報告 平沼勝男

7/22 クヌギの樹液にたくさんのカナブンが集まる。ルリタテハも負けじと吸蜜。カブトムシの姿はなし。

田んぼではハスの花が5個咲いていた。やはり大きくて美しい。オオシオカラトンボ二つのペアが交尾。目線を下げるとオオイトトンボが複数飛んでいた。畔にヒクイナ3羽。私に気付いて慌ててアシ原に飛び込んだ。キビタキ2羽以上が競うあうようにさえずり、谷津田に響き渡っていました。

< 小山町 > 報告 いゆ：碓夕子、いた：碓泰洋、高：高山

7/2 ハンゲショウやアキノタムラソウが咲く、オオヨシキリの幼鳥が3羽、親から餌をもらっていた(高)

7/3 オモダカが開花(高) 7/6 ヤマユリが大輪の花を開く、ニイニイゼミの声を聞く(高)

7/10 田んぼの畦でノカンゾウが咲く、久しぶりにチョウトンボの姿を見る(高) 7/17 モズの親子が鳴きながら田んぼを飛び回る、エノコログサが出穂(高) 7/20 イネの葉にシロオビトリノフンダマシが止まっていた(高) 7/22 ヒヨドリが色づき始めたウワミズザクラの実を食べに訪れていた、カラスウリが開花、田んぼの上空をオニヤンマが飛翔(高) 7/26 アブラゼミ、クマゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどゼミがほぼ出揃う(高) 7/27 畦でタカサプロウが咲く、最近田んぼで姿を見ていなかったセグロセキレイが丘の上の畑に来ていた(高) 7/28 シオカラトンボとアブが戦っていた(いた) イナゴがイネの葉っぱをムシャムシャ食べていた(いゆ) 7/29 激しく鳴いていたヒヨドリのカップルがハシブトガラスを追い払う(高)

【イベントのお知らせ】主 催：NPO法人 ちば環境情報センター

< 下大和田谷津田 > 連絡先：小西 TEL.090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

・第308回 観察会とゴミ拾い

日 時：2025年 9月 7日(日) 9時45分～12時 雨天決行

内 容：秋の花が咲き始め、赤とんぼも色付く頃です。トンボの調査をしながら谷津と森を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100円

・森と水辺の手入れ

日 時：2025年 9月21日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内 容：観察路の整備と復田した田んぼの手入れを行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・森の手入れ

日 時：2025年 9月28日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内 容：森の木の伐採や畑の整備を行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

< 小山町谷津田 >

8月のYPPのイベントはお休みです。次回は9月に黒米の稲刈りを予定しています。

参加ご希望、その他の問い合わせは、ceic.ypp.oyama@gmail.com までお気軽にメールでご連絡下さい。